

高瀬舟（森鷗外）

小山 明里



一 作者と作品について

森鷗外（一八六二～一九二二）は現在の島根県津和野出身の小説家、軍医である。「舞姫」「雁」「山椒大夫」「渋江抽斎」など多数の作品を残している。

安楽死学説を翻訳した「甘暎の説」（一八九八）、喉に血膿が詰まって窒息死した弟篤次郎の状況（一九〇八）、生後間もない二男不律の百日咳による死（一九〇八）同じく百日咳に苦しむ長女茉莉をモルヒネ注射で安楽死させた体験（「金毘羅」）（一九〇九）など、鷗外は安楽死と深い関わりがある。

森鷗外は「高瀬舟」と同時に自作解説「高瀬舟縁起」を発表している。これによって長らくテーマは「知足」か「安楽死」か、それとも両方かで議論されてきた。その後、研究の動向は「（一）ふたつの主題が分裂しているか否か、（二）分裂しているとして、両者のいずれに比重が置かれているか、（三）ふたつのテーマを統一する主題は果たして発見できないのか、といった点に集中している」という流れで変化している。

近世文学の伝統が生きていた明治三十年代ぐらいまでは縁起、ないしは小説の成った由来を示した小文がつけられることがよくあったという。「高瀬舟」を「高瀬舟縁起」と合わせて読むべきかどうかでも議

論が分かれている。

その「高瀬舟縁起」のなかで「高瀬舟」は、江戸時代の随筆集「翁草」の中の「流人の話」をもとにして書かれたと述べられている。

教科書の資料集を見ると、（第一学習社『国語便覧』監修 稲賀敬二・竹森天雄・森野繁夫）「文学の学習 近現代 森鷗外」という項目の「歴史小説と史伝」に以下のように記述があり、「高瀬舟」も歴史小説の一部として扱われている。

そしてその創作理論として「歴史其儘と歴史離れ」という論文を書いている。「歴史其儘」とは、史料を尊重して、勝手な空想をつけ加えないこと、「歴史離れ」とは史料を離れて小説的なフィクションを付け加えることをいう。

「高瀬舟」は歴史小説であるのか、ということも議論がなされてきた。歴史小説とするならば、情報を十分に収集して作品の解釈に臨まなくてはならない。藤本（一九八四）は「鷗外の歴史小説のねらいは、現代批判と諧調の美学である」と述べている。「諧調」とは、「硬質のテーマを、鷗外は荒々しく主張するのではなく、美的虚構を用いているらしい」としている。例えば「対句、対照、象徴、比喩などをつかって、あるいは中国文学の技巧を借り、あるいはイプセンのごとく劇

的に、あるいはメーテルリンクの象徴劇風に、書いて見せた」という。

しかし、小田島(二〇〇四)は『高瀬舟』Ⅱ「流人の話」ということにはならない」とし、『高瀬舟』ではこの同心に羽田庄兵衛という固有名詞が与えらればかりか、罪人喜助の話を聞くうちに我が身を照らし合わせ、更には深い昏迷の淵に沈んでいく彼の姿を浮き彫りにしたのは、明らかに鷗外の独創であった。」と言述している。

檀原(一九九九)によると、文学研究において、テーマの前半は足ることを知る、後半は安楽死であるとされてきた。

文学研究史としては、まず作品の評価を低くとらえるような、作品に対して否定的な論文が発表され、後に、喜助を評価する論文が登場したということである。研究が進められるうちに、作品、喜助への評価の変化が起こっている。そしてその後、喜助を見る庄兵衛の観察により語られるということが注目されるようになった、ということが言えるという。

「足ることを知る」「安楽死」、さらに近年では「オオトリテエ」という主題について文学研究、文学教育それぞれにおいて論文が発表されてきている。この主題については後に取り上げ考察する。

二 叙述について

知恩院の桜が入相の鐘に散る春の夕べに、これまで類の無い、珍しい罪人が高瀬舟に乗せられた。

「入相の鐘」が寺院の厳粛な雰囲気をかもしだしている。また、鐘の音が時刻を表しているとも考えられる。「入相の鐘に散る春の夕べ」という表現は、読者に入相の鐘を背景として桜が散るといふ映像、遠

く聞こえる鐘の音、という目と耳からの情報を与えている。「春」という季節、「夕べ」である時刻は美しくも物悲しい様子を演出している。罪人を乗せた船なので、薄暗い方が良い。

また、これまでの罪人は悲しんでいるのに、喜助は悲しんでいないという比較を、桜の表す明るさと夕べの薄暗さで表現しているのではないか。

「これまで類の無い、珍しい罪人」とは、後に喜助が目が輝いでいる様子を庄兵衛が不思議だ、と思うことを示唆している。

それは名を喜助といって、三十歳ばかりになる、住所不定の男である。

初めて語られた喜助の情報は、最低限のものでしかない。喜助は、三十歳、庄兵衛は後に初老であることが明かされる。この年齢差は、庄兵衛が喜助を理解するのに影響を与えていると考えられる。たとえば、後に「口笛を吹き始めるとか、鼻歌を歌いだすとかしように思われた」という表現があるが、それは庄兵衛にとっては喜助が三十歳という本来ならば社会的な責任を負う年齢の男が無邪気、無垢、自由なようにみえた、ということがわかる。

さて牢屋敷から棧橋まで連れてくる間、この痩せ肉の、色の青白い喜助の様子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬って、何事につけても逆らわぬようにしている。

痩せ細り青白い顔にはこれまでの生活の苦勞が刻まれている。「自分をば」という表現からは、語り手が喜助に寄り添い語っていることがわかる。

しかもそれが、罪人の間に往々見受けるような、温順をよそおって権威にこびる態度ではない。

権力の最下層にいた喜助は権威にこびるほど世渡りが上手な、世慣れた人間ではないことがわかる。権力が自分たち兄弟をこれまで助けてくれなかったということがあるから媚びていないのではないか。

庄兵衛はまともには見ていぬが、始終、喜助の顔から目を離さずにいる。

庄兵衛は護送する役人なので、ジロジロ見られない立場である。しかし、この珍しい罪人が気になって仕方がない。それゆえ、「まともに見ていない」と「始終目を離さない」で矛盾がうまれたのだろう。

まず、「まともに見ない」は漠然と不思議だと考えているだけで、具体的に分析などはしていない状態だといえる。だから、ぼんやりとしながら常に喜助の顔が視界に入っている状況だということが読み取れる。

そして、不思議だ、不思議だと心の内で繰り返し返している。

「不思議だ、不思議だ」と連続して繰り返し返す人はそういない。なので、ここは「不思議だ…(少し時間の経過)…やっぱり不思議だ」というように時間の経過が感じられる。

また、心の「内」という表現が、心の奥底からの気持ちであることとを表しており、「繰り返し」というのが、喜助へ理由を聞いてみたいという気持ちの高ぶりを表している。

それは喜助の顔が、縦から見ても、横から見ても、いかにも楽しそうで、もし役人に対する気がねがなかったなら、口笛を吹き始めるとか、鼻歌

を歌いだすとかしように思われたからである。

三十歳の男が、いかにも楽しそうな様子を見せ無邪気な態度を取るのは異様な光景であるが、喜助の楽しそうな様子からは、これまでの生活苦からの解放や安定した暮らし・身の安全に対する期待が感じられる。「縦から見ても、横からみても」という表現からは、どこから見ても楽しそうであることと、文のリズム(語調・語感)を整える印象をうける。横からというのは想像がつくが、縦からということは、上からなのか、それとも正面からなのか様子なのかどちらなのだろうか。また、役人に対する気がねという部分からは、庄兵衛に対する気遣いや敬う様子を感じ取ることができる。

庄兵衛がためには、喜助の態度が考えれば考えるほどわからなくなるのである。

「庄兵衛がためには」とは、「庄兵衛にとつては」という意味になり、これは喜助に対して庄兵衛自身の意識が入り込んでいることがわかり、又さらに、「考えれば考えるほど」とは、この段全体で述べられている「喜助の他の罪人との異質感」における庄兵衛の長い思考・多くの興味を表れている。そして、どれだけ喜助について考えても謎はより一層深まるばかりであり、喜助に対してより興味をもっている。

他人対して好奇心をもつ性格であることがわかる。

何事かお役人に見とがめられたのではないかと気遣うらしく、居ずまいを直して庄兵衛の気色をうかがった。

先ほどの「口笛を吹き始めるとか、鼻歌を歌いだすとかしそう」という態度とはうってかわって、びくびくとしている。先ほどは役人が

見ていても気にせず楽しんでそうな表情をしていたが、見とがめられるのはまずいと気付いたのか。

「京都は結構な土地ではございますが、その結構な土地で、これまで私のいたして参ったような苦しみはどこへ参ってもなかるうと存じます。

「これまで私のいたして参ったような苦しみはどこへ参ってもなかるう」と思うほどつらい体験をしてきていた、とはつきりと述べている。これまでの暮らしに不満を持っている。後に庄兵衛によって「足ることを知る」と判断されるような、満たされた生活を喜助は送って来なかったことがこの言葉からわかる。

「わたくしはこれまで、どこといていて好い所というものがございませんでした。

「喜助を役場につきだしたのは、かれの行為が村の掟を破犯するものだったからである。かれはその村からも追放されたのである。このために、喜助にはもはや帰るところがどこにもなくなったのである。だから、かれはどこにも居場所がないと述べ、島送りという強制住居指定を受け入れたのではないか。」という解釈をしている竹内(二〇〇五)の論文がある。

竹内によると、これらの言葉が町奉行に向けられたものとして読むと、それは皮肉をふくんでいるということができるといえる。

この二百文を島でする仕事の元手にしようと思しんでおります。

「いかにも楽しそう、もし役人に対する気がなかつたなら、口笛を吹き始めるとか、鼻歌を歌いだすとかしように思われ」る態度

をしていた原因は、国から貰った二百文島で新しい仕事を始められるからであるからだ、とここで喜助によって明かされる。

聞くごとあまりに意表に出たので、これも、しばらく何も言うことができずに、考え込んで黙っていた。

あまりに意表に出た、ということは自分のこれまでの経験では喜助のような境遇の人物の話聞いたことがないということが予想される。下層に生きる人間の心情や暮らしを知り、驚いている。

初老に手の届く年になっていて、もう女房に子共を四人も生ませている。

弟と二人暮らしだった身寄りのない喜助とは違い、家族がいる。

何者かわからぬ喜助の言葉を受け止めるのは、生活に疲れ人生に悟りを開きつつある初老の庄兵衛である。人生をそれなりに経験してきた庄兵衛だからこそ、喜助に興味を持ち、また、喜助に自分にもないものを持っていると思ひ込んだ。

それを見つけさえすれば、骨を惜しまずに働いて、ようよう口を糊することのできるだけで満足した。

「ようよう」とはかろうじて、やっとなんかという意味でとる。

一生懸命働いて、日々の生活を最低限の水準で生きているだけで満足できるという喜助の価値観が分かる。また、そのことが他の罪人との違いを生み出している。また、庄兵衛が喜助という人物に興味を持った理由も、この喜助の価値観を自分と比べてみたからであると考えられる。

しかるに、そこに満足を感じたことはほとんどない。

しかるに、というのはそれなのという意味であり、たいてい出納のあつている、手一杯の生活を送っているのに、ということである。つまり、ここでは、手一杯の生活（余裕のない）生をプラスにとらえていると考えることができる。

「そこ」というのはそんな生活のことであり、そこに満足を感じたことは「ほとんど」ないと思つている。ここでの「満足」とは、これ以上を求める気持ちを持たないことと解釈する。また、「ほとんどない」とあるので、最低でも一度は満足したことがある、と考えられる。つまり、今の暮らしに不満は持つていないが、大満足をしている訳ではなく、その時々には満足だが、ふとした時に不安を感じるという気持ちを表していると考えられる。

常は幸いとも不幸とも感ぜず^に過^{して}いる。

今の暮らしを幸せだとは思つていないが、不幸せだとも思つていない。惰性で生きていけると言えるかもしれない。しかし、無職になることや病氣への漠然とした不安を抱いている。しかし、喜助からみれば庄兵衛は十分に幸せな暮らしをしているといえる。

しかしそれはうそである。

この一文を境に庄兵衛の違いについての仮説がはっきりと否定されている。「それ」とは喜助に身寄りがないので彼が満足を知っているということである。庄兵衛はそれを否定し、より根底にある喜助との違いを発見しようとするが、この後に庄兵衛はその答えを見つけないに至っていない。この一文は庄兵衛が喜助との違いについて悩んでいるこ

とが顕著に現れた一文だと考えられる。

このとき庄兵衛は、空を仰いでいる喜助の頭から毫光がさすように思った。

今まで不思議に思つていた喜助の他の罪人との違うように感じられる異質性が「毫光」で表される。「毫光」とは仏の眉間から放たれる光であるので、非常に尊いもの、神々しいもの、敬うべきものと読み取ることができる。喜助の欲の無さという異質性をそのように捉え彼に對し神秘的な尊敬の念を感じている。

「空を仰いでいる」という行為に對しては、罪人が許しを乞うような、悲しみや途方に暮れたような行動として捉えるならば、「毫光」という言葉との対照性・ギャップがある。一方、悟りを開いたようなすがすがしいような行動ととるならば神らしいイメージで捉えることができ、「毫光」という単語との統一性がある。

庄兵衛は、今さらのように驚異の目をみはつて喜助を見た。

「今さらのように」の意味は、まるで今初めてあるかのように、改めてという意味である。

庄兵衛は今までずっと船の上で喜助をみていたが、「欲を踏みとどまる」という一般の人間にはできないことをしている喜助のすごさを感じ、仏のようという尊敬の念まで抱き、改めて喜助をみた。「驚異の目をみはつて」からは、庄兵衛の静かだが、隠しきれない驚きと衝撃がと見とれる。

今度は「さん」といったが、これは十分の意識を持つて呼称を改めたわ

けではない。

喜助の姿をみて「さん」と言わなければならないと思ったが、自分の役職や立場を考えていなかった。この部分が十分の意識を表している。

はじめは喜助のことをただの罪人としか思っていなかったが、その言動を見ているうちにだんだんと「不思議な人」ひいては「うらやましい存在」（「毫光が差すように思った」から）というように変わっていき、喜助への認識が良い方向へ変わっている。その過程で、「さん」と呼んでしまふに至ったということが表れている。また、「十分の意識」について、これは庄兵衛の自分の役割に対する認識であり、それが足りずに「さん」をつけることになったと読む。これで、後の分との整合性があるように捉えられる。

その声が我が口から出て、我が耳に入るやいなや、庄兵衛はこの呼称の不穏当なのに気がついたが今更既に出た言葉を取り返すこともできなかった。

声は無意識に近い状態で発せられた。自分が発した言葉ではないように感じる。

「我が口から出て、我が耳に入るやいなや」：他人事のようなのである。普通は考えてから口に出すはずである。

「さん」という言葉ではなく「声」としてあるところから、「喜助さん」という呼び方が無意識に近い状態で発せられたものである、あるいは他人の発したものであるかのように感じられたのではないか。「さん」と言ったことに気付いて初めて庄兵衛は喜助に対する認識が変わりつつあることに気付く。「今更既に出た」という表現から、言い直す

ことは可能であるが言い直してないので、「さん」を付けることが適当であると思っている。社会的身分という点だけが不穏当に感じられるのではないか。「言葉を取り返す」という表現は、「取り戻す」ではない。言葉は発せられてしない、自分のものではなくなっていることがわかる。

すると弟の目の色がからりと変わって、晴れやかに、さもうれしそうになりました。

・この場面では、目が口とほぼ同じ役割を担っている。早く殺して欲しいという気持ちを、喜助の弟は言葉よりも目で伝えているのである。喜助が弟ののどに刺さっている剃刀を抜いてやると言った時には、それまでの恨めしそう・憎々しい目から晴れやか・さも嬉しそうな目になった。目の色が変わった時の表現「からり」は洗濯物がからりと乾く、というように乾燥した、さっぱりしたイメージを抱かせる。喜助は目の色が変わったことをプラスにとらえていると考えられる。

また、「さも」という表現は「さも悪気がなかったように」等、悪意が無かったことを正統化する時に多く使われるイメージがある。このことや、文末の「なりました」という喜助視点の表現から、実は弟殺しは喜助の悲願で、庄兵衛に語った話はすべて作り話なのではないかと邪推もできる。

・「さも」という言葉は「いかにも」「みるからに」「実に」という言葉に置き換えられる。このことから、弟は「誰が見てもすぐわかるぐらいの分かりやすさで表情を変えた」「ただ『嬉しそう』」になったのではなく、「ものすごく『嬉しそう』」になったことが読み取れる。

この二つの解釈は対立している。「悪意が無かったことを正統化する時に多く使われる」「弟殺しは喜助の悲願」であり「庄兵衛に語った話はずべて作り話」とする解釈と、弟は「ものすごく、嬉しそう」になった」と解釈するものがある。喜助の心情をどう読みとるか、この「さもうれしそうになりました」という表現で解釈が分かれる。

もうだいぶ家のなかが暗くなっていましたから、わたくしにはばあさんがどれだけの事を見たのかわかりませんが、ばあさんはあつと言ったきり、表口をあげ放しにしておいて駆け出してしまいました。

この事件の目撃者である「ばあさん」は、死んだあとの様子しか目撃していない。

この「弟殺し」の事件の本当のところはどうであったか。喜助は罪を犯していない、初めから弟は死んでいた、冤罪であるということも考えられる。一方、意図的に殺したことを、自分に罪が無いように話を作りかえているとも考えられる

わたくしは剃刀を抜く時、手早く抜こう、真直に抜こうというだけの用心はいたしました。

喜助の言葉からは「手早く」「真直に」という表現が印象に残る。喜助は弟を殺してやろうという意思があったのかは定かではない、と解釈できる。喜助は自分は弟を殺していないと、自己弁明をしているのではないか。

どうも抜いた時の手応は、今まで切れていなかった所を切ったように思われました。

「どうも抜いた時の手応は」という言い方は喜助にとって弟が死んだ理由ははっきりしない、ということがわかる。喜助によると「今まで切れていなかった所を切った」ようだということになる。

ほとんど条理がたちすぎているといってもいいくらいである。

この一文は、唯一喜助の証言を疑っているものだ。この一文があることで、読者は今までの喜助の話が作り話かもしれないという疑問を抱かされる。しかし、反対にこの一文をあえて挿入し、その後弁解するということと読者が疑問を抱くことを防ぐ役割を果たしている可能性もあるという解釈もある。

庄兵衛の心の中には、いろいろに考えてみた末に、自分よりも上のものの判断に任すほかないという念、オオトリテエに従うほかないという念が生じた。

「いろいろに考えてみた末に」「自分よりも上のものの判断に任すほかない」という結論に至ったのは、役人として初老まで働いてきた庄兵衛の賢い生き方、波風を立てない思考のパターンによるものである。喜助をきっかけに、考えはしたものの、行動に移すほどこれまでの人生を棒に振ることはできないでいる。

ここで「オオトリテエ」という表現が使われたのはなぜか。庄兵衛の生きた時代には無いことばである。

庄兵衛はお奉行の判断を、そのまま自分の判断にしようと思ったのである。

庄兵衛が喜助の罪に対しての考えを放棄しようとしている。しかし、

結局お奉行様の判断は「弟殺し・島流し」であるために、庄兵衛には腑に落ちないものが残ってしまう。

人殺しには違いないという判断が変わることはないが、庄兵衛はそのまま自分の判断にしていることから、罪かどうか悩んでいても結局は罪なのである。

どうすることもできないという結論がこの一文に隠れているようにも思える。

次第にふけていくおぼる夜に、沈黙の人二人を乗せた高瀬舟は、黒い水の面を滑っていった。

ぼんやりとした夜がだんだんとふけていく。庄兵衛と喜助はそれぞれ考え込んでいたので、二人は話すこともなくお互い黙っている。「黒い水の面」は、夜だから黒く見えるということと、庄兵衛は喜助のことが腑に落ちず、心が晴れやかでないということが分かる。おぼる夜も、もやもやとした心を表している。「滑っていく」は、よりゆっくりしている様子、静かな様子。ほかの生き物がいる気配がしない、また、風などの自然現象が起こっていない様子。「沈黙の人二人」という表現で視線が船の上空（または遠く）になったことがわかる。

三 考察

これまで議論されてきた三つの主題について、本文を引用する。また、それぞれの主題について述べられてきた論を紹介する。

(一) 主題について

(ア) 足ることを知る

「足ることを知る」という言葉は、喜助の楽しそうな姿をみて庄兵衛の観察により語られた言葉である。以下が該当する本文の箇所である。

さて桁を違えて考えてみれば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでいのに無理はない。その心持ちはこっちから察してやることができる。しかしいかに桁を違えて考えてみても、不思議なのは喜助の欲のないこと、足ることを知っていることである。

「足ることを知る」の主題を考える上で、東洋思想、特に『老子』を視野にいれてもいいのではないかと主張もある。また、鷗外が大正四年の師走に、一切の公職から身を引こうと決心した時に『高瀬舟』として表出したのではないかと指摘もある。

喜助の本心はどうか、ということを考えて、弟との関係性が喜助にとつては絶対であり、それ以外の者には自分たちの苦は理解されないとしてお上やお奉行、庄兵衛にたいして「皮肉」を言っている、と解釈することができる。

(イ) 安楽死

庄兵衛はその場の様子を目のあたり見るような思いをして聞いているが、これがはたして弟殺しというものだろうか、人殺しというものだろうかという疑いが、話を半分聞いた時から起こって来て、聞いてしまっても、その疑いを解くことができなかつた。弟は剃刀を

抜いてくれたら死なれるだろうから、抜いてくれと言った。それを抜いてやって死なせたのだ、殺したのだとは言われる。しかしそのままにしておいても、どうせ死ななくてはならぬ弟であつたらしい。それが早く死にたいと言つたのは、苦しさに耐えなかつたからである。喜助はその苦を見ているに忍びなかつた。苦から救つてやろうと思つて命を絶つた。それが罪であろうか。殺したのは罪に相違ない。しかしそれが苦から救うためであつたと思つと、そこに疑いが生じて、どうしても解けぬのである。

「苦から救つてやろうと思つて命を絶つた。それが罪であろうか。」という言葉は、弟殺しの罰を受けることになつた喜助の告白、証言を聞いて庄兵衛により語られた言葉である。「しかしそのままにしておいても、どうせ死ななくてはならぬ弟であつたらしい」のは、本当なのか。喜助には初め医者を呼ぶという選択肢もあつたということも確認したい。

また、「安楽死」という主題は、小説の内容を読む行為である。「安楽死」を主題としたとき、小説作品そのものをよむというより、「安楽死」という問題を議論するということに重きが置かれていく授業となるだろう。

(ウ) オオトリテエ

庄兵衛の心の中には、いろいろに考えてみた末に、自分よりも上のものの判断に任すほかないという念、オオトリテエに従うほかないという念が生じた。庄兵衛はお奉行様の判断を、そのまま自分の判断にしようと思つたのである。そうは思つても、庄兵衛はまだどこ

やらに腑に落ちぬものが残つているので、なんだかお奉行様に聞いてみたくてならなかつた。

「オオトリテエ」という社会批判の主題に関しては、篠原(二〇一)は「オオトリテエ」という言葉を「庄兵衛の心中表現」としている。一方、夏目(一九九四)は、この「オオトリテエ」について「寛政期の人間が使うはずのない言葉が使われている」として、「近代小説確立以前の、作者と語り手と、明確に分化されていないことの一つの表れ」として考えたいとしている。

ここで、「オオトリテエ」という言葉は誰の言葉なのか、なぜこの言葉が使われたのかという《語り手》の問題を考える必要がある。

(二) 《語り手》への着目と解釈の変化

斎藤(二〇〇九)による自由の森学園の高校二年生の授業記録を基に考察を行いたい。斎藤は、「何が書かれているか」ではなく、「どう書かれているか」に着目し、「高瀬舟」の空間の持つ意味、《語り手》と登場人物の関係性を読むと小説の見え方そのものが変わってくる、と主張している。

- I 《語り手》は、「高瀬舟」という空間をどのように描いているか
- II 《語り手》は庄兵衛と喜助をどのような人間として描いているか
- III 喜助の話聞く前と後で、庄兵衛の変化はどう語られているか
- IV 鎖国している江戸時代の話に、「オオトリテエ」などというフランス語が持ち込まれているのはなぜだろうか。

「喜助に対する庄兵衛の認識のありようを問う」というねらいで行われた授業で行われた議論を取り上げ、生徒の解釈が対立していく様子について考察する。傍線部は小山によるものである。

T 喜助の話を庄兵衛は聞いて、喜助を「足ることを知っている」人、「欲のない」人、あるいは「踏み止まってみせてくれる」人として、仏様のように思っている。これに関してはいいね。でも喜助の話が庄兵衛をおさずに、ぼくらの目から見るとどうだろう。喜助の発言から、どんな感じを受ける？

中略

S なんでおれだけがこんなに苦しまなければならないのか、と言っているようにも見える。

S 喜助は自分に対して納得させて生きようと思っているのかな。

T という読み方をどう思う？

S ちよつとわからない。

S いやわかるよ。

S 読みようによっては、お上に対する批判とも。

S でも喜助は自分の思っていることを自然にしゃべっているよね。

S それはそうだと思うよ。

S いや、皮肉を言っているのだけれど、庄兵衛はそれを理解していないということだと思う。

S いや、と言うよりも、この時代の社会構造の底辺にいた喜助が、全然意識はしていないけれども、思ったことを自然にしゃべると、お上や庄兵衛に対する批判とも読める言葉が無意識に出てくるとい

うことでは。

S 意識してないかなあ。

S 全然意識してないと思うよ。喜助はもともと、自分はこんなに一生懸命働いているのに、なぜこんなに苦しいのか…、という気持ちで底辺にあつて、それが浮かび上がってくるのだと思う。皮肉を意識的に言うほどの強さはないと思う。

S そうかも。

T みんな今問題になっていることわかる？どちらの意見とも、この喜助の言葉が聞きようによっては皮肉に聞こえるということは共通している…、お上とか庄兵衛に対する皮肉とも読める、ただ一方は皮肉としては話していないという読み…。

S そう。そうした生活をしてきたから、どうしてもそういう言葉が出てくるだけ。

T で、一方は意識的に庄兵衛を追い詰めているように読めると。

S そう読んだ方が喜助が人間くさくみえるし、おもしろい。

T おもしろいかどうかではなくて、この文章からどう読めるかということ。でもここが意識的かどうかというのは、この場面だけではなくて文章全体で考える必要があるね。このあと喜助の弟殺しの話もあるし。ただここで確認できるのは喜助の話は聞きようによっては皮肉に聞こえる内容をもつていて、ところが庄兵衛は？

S 庄兵衛にはこのことが見えない。

T 見えていないのに喜助のことを理解したと思っている。

T 人間ってほかの人間のことを、表面的なところで理解したつもちになつてしまうんだよね。深層の部分が見えていない。

S 喜助の話がやたら丁寧なのは どうしてだろう？

- S そういう時代だったんじゃない。
- S おれの読み方からすると、それ自体が皮肉なんだけど…。
- S お上の処置に納得しないと生きていけないのだから、納得しているようなもの言いになってくるのでは？
- T 喜助は半年取り調べを受けていると書いてあったでしょ。そういう取り調べを続けていると…。
- S 取り調べに対して答えているような言葉遣いになってしまふ。
- S でもそれは、自分がなんとか生きていく知恵でもあるでしょ。
- T 自分自身をそうした権力構造に慣らししていくようになったと。
- S 庄兵衛は役人の一番下だから、本当は喜助の話の深いところに気づく可能性をもっていたはずなんだけど…、庄兵衛自身も下の者の厳しさがわかると思うし。
- T しかも奉行所とは違う「高瀬舟」という空間の中…
- S でもさ、ここでの庄兵衛は自分が役人であるということをはほとんど忘れかけているでしょ。喜助に話しかけたり、あとでは「喜助さん」なんて「さん」をつけたりさ…。
- S そういうところから見ても見えない。
- S だからこそ見えないともいえるべきなのでは。
- T そうだね。
- S そうして何か隠されてしまふ。
- S 喜助がそうして包み込まれてしまっている。囲い込まれてしまっている空間というのは、現代でもそういう権力の流れているのは変わらないと思う。人間が生活していくうえでどうしても生じてしまう。そういうところを自分たちの生活とたぶって見えてくるというのはすごい…。

T この小説ってすごいと思う。語りの方法を読むと、喜助の話を庄兵衛がどう聞いたかということが問題になり、そこから庄兵衛の認識のあり方が問題になり、しかもそうした庄兵衛のもっている問題は、ぼくらがみんなもっている問題点だといふ…。

S 最初読んだときにはウチらはそうは読めなかった。喜助のことを庄兵衛が表面的にしか読めなかったように、庄兵衛のことをウチら読者は表面的にしか読んでいないということだよ。そういうことも含めて、深く読んだ時にもっと見えてくるものがある。

斎藤の主張する《語り手》への着目は、語られた内容を絶対的なものとして受け入れるのではなく、語られた内容が本当かということと疑う視点を生徒に与えた。その結果喜助の言述は皮肉ではないか、という解釈が生まれた。

「喜助の話がやたら丁寧」なこと「おれの読み方からすると、それが皮肉なんだけど…」と主張しているということは、喜助の丁寧な言葉使いと本心がかけ離れている、あえて批判的な内容の言述を丁寧な言葉で厭味つたらしくいつているという解釈をしていることがわかる。

この生徒の主張から考えられるのは、「喜助はにっこり笑った。」という丁寧な態度、「親切におっしゃってください、ありがとうございます。」という前置きから喜助の話が始まり、そして「これまで私的いたして参ったような苦しみはどこへ参ってもなからうと存じます。」と自分の身の上話を淡々と語る喜助に対してひっかかりを覚えた、ということだ。

この喜助の言葉を「皮肉」であると解釈した生徒は、自身の生活経

験で、嫌味をあえて相手にすぐにはわからないよう、丁寧なことばでいった経験があるのかもしれない。特に、本心をそのまま言えないような状況、例えば立場が上の人に対して、自分の理解してもらえない苦しさを自嘲的に話すような経験があったのかもしれない。そのような経験をしてきた場合と、無かった場合ではこの「皮肉」という解釈を理解できるかできないか、意見が分かれてくる。

生活体験が、登場人物の態度、会話表現の解釈に影響を与えている。この授業では、語りに着目させることで、喜助の直接話法の語りとその内容を読んで、小説の語られた内容をそのまま鵜呑みにするのでなく、自分の思考や生活体験と照らし合わせて登場人物の心情を捉えるきっかけを得ることができている。

このような「喜助の言述は皮肉」という読みについては、竹内(1990)も言及している。

「喜助の語りは、その内部に矛盾をはらみ、かならずしも意味的に統一していると思われぬ」、「外部からの有罪の裁きは拒否しても、自分のからだの側からは自分の行為を有罪と認め、それをすすんで受け入れている」と述べたうえで、喜助が現在「いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬って、何事につけても逆らわぬようにしている」こと、「その額は晴れやかで、目にはかすかな輝きがある」こと、「喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、いかにも楽しそうで、…口笛を吹き始めるとか、鼻歌を歌いだすとかしうに思われた」ことの理由が以下の三点にまとめられるとしている。

- 1、死罪ではなく遠島に処せられたので弟の献身的な行為によって与えられた生をまっとうできる
- 2、自ら進んで受け入れた罪を遠島という罰で償える

3、だれかを犠牲にしなければ自分が生きられない「苦」から解放され、二百文を元手として島で仕事をする事ができる

これは、喜助の心情に迫ろうとするもので、喜助の心情に迫り解釈を行うことで作品をより深く面白く読むことができる。

もちろん、小説本文を忠実に読まなくてはならないという主張、生徒が作品を生活体験で塗り替えるという行為を批判的にみる意見もある。しかし、今回の『高瀬舟』の「喜助の言述は皮肉に聞こえる」という生徒の読みに着目し、教材研究を進めるうちにわたし自身『高瀬舟』をより深く解釈していくことができた。解釈を交流するときに注意しなくてはいけないのは、その解釈がどこを、何を根拠にしているかということを明らかにすることである。そこを徹底しなくては、その解釈を交流し合うことができない。「喜助の言述は皮肉」とした生徒の解釈が教室で共有されなかったのは、なぜその生徒がそう読んだのが明確にならなかったからである。教師は生徒の解釈について丁寧に扱い、追求する姿勢が必要である。

《語り手》に着目した教材研究では、《語り手》が誰かに寄り添って語っていた場合、その視点から離れて解釈することができるので、解釈は多義的になる。《語り手》に着目することで、登場人物の心情により迫って、自分の解釈を考えるきっかけを与えることができる。

しかしながら、《語り手》が小説世界でどういう役割をしているのかということをも十分に分析してからでないと、安易に授業に取り入れると混乱を招くことも予想される。

参考文献

- 出原隆俊、「高瀬舟」異説、『森鷗外研究』、森鷗外研究会、一九九九
- 小田島本有、「疑問の行方―森鷗外『高瀬舟』論―」、『釧路工業高等専門学校紀要』、釧路工業高等専門学校、二〇〇四
- 斎藤知也、『教室でひらかれる〈語り〉―文学教育の根拠を求めて』、教育出版、二〇〇九
- 篠原武志、「教室という場の「高瀬舟」―「オオトリテエ」の受け取り方を中心に―」、『同志社国文学』、同志社大学文学会、二〇一一
- 竹内常一、「〈再審の場〉としての「高瀬舟」」、田中実・須貝千里編、『新しい作品論』へ、〈新しい教材論〉へ 1、『右文書院』、一九九九
- 竹内常一、『読むことの教育―高瀬舟、少年の日の思い出』、山吹書店、二〇〇五
- 檀原みずす、「高瀬舟」、『国文学 解釈と鑑賞』、五七（一一）、至文堂、一九九二、一一九―一二二頁
- 夏目武子、「森鷗外 『高瀬舟』の印象の追跡 文教研秋季集会の記録 “読み”の楽しさ・むずかしさ―文体との出会い』、『文学と教育』、文学教育研究者集団、一九九四
- 藤本千鶴子、「歴史小説の課題』、『国文学 解釈と鑑賞 一月臨時創刊号 森鷗外の断層的撮影像』一九八四